
IS(インフィニットストラトス) ~ 獣戦機に乗る者 ~

紅の牙

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

インフィニットストラトス

IS 獣戦機に乗る者

【Nコード】

N9984X

【作者名】

紅の牙

【あらすじ】

神のミスで死んでしまった主人公が、ISの世界に転生。神に頼んで作ってもらった機体でISの世界を生きる

ブローグ

「・・・・・・・・・・」

目が覚めると、俺は不思議な空間に浮かんでいた

「・・・・・・・・此処はどこだー!?!」

周りに誰も居ないので、俺は思いっきり叫んだ

「どうなってるんだ?俺は女の子を助けて死んだはず、それなのに
なんでこんな所に浮いてるんだ?わけわかんねー!?!」

「つたく、目が覚めたばかりだったのにうるせえやつだな」

俺の前に白い服を着た青年が現れた

「・・・・・・・・あんた誰?」

「俺?俺は神だ」

「つで、その神様が俺に何のようなんだよ」

俺が聞くと

「お前に謝りに着たんだよ」

「は？」

「お前はあの時、死ぬはずじゃなかったんだよ。だけど、俺のミスでお前は死んだ。だから誤りにきたんだ。・・・すまなかった」

神が俺に頭を下げた

「・・・頭を上げてくれ。過ぎちまった事はもう戻せないからな」

「お詫びとこっちや何だが、お前をインフィニットストラトスの世界に転生させることにした」

「何でISなんだ？」

「俺が最近ISにはまってるから」

「それが理由かよ」

俺は突っ込みを入れた

「細かい事は気にするな。それと、五つまでお前の願いをかなえてやる、何が欲しい？」

「・・・じゃあ、身体能力MAXと覇気、身体能力の基準はスパロボ。俺の専用機。機体はダンクーガノヴァでコアと動力にはGNドライブとアブソリュートアクティブフォースジェネレーターを複合したもの。データ表示ではアブソリュートジェネレーターのほ

うで。機体を作る知識（SRWの）、コア、資材。後は秘密基地、出来れば場所は龍牙島で基地はドラゴンスハイブ」

「その程度ならお安い御用だ。ふん！！」

神が変な声を上げると、俺の前に五つのコアと俺の専用機『ダンクーガノヴァ』が現れた（勿論待機状態で）

「じゃあ、頑張れよ。それと、時間帯は原作開始の5年前ぐらいだからな」

そついうと、俺のいた場所に穴が開き、俺は落ちていった

「こんなオチでいいのかよー！？」

設定

設定

名前 飛鷹葵（ひだかあおい）

年齢：11歳（原作前） 原作開始時は16歳

容姿：フォルカ・アルバーク 髪の色は黒

詳細：転生前は大のロボット好きでスパロボなどをやっており、OG3で機神拳を見た時、体に電気が走り劣化版機神拳を習得した。転生するときの特典で覇気を貰い完全な機神拳を習得した、その実力は素手でISを倒せるほど

専用機

機体名：ダンクーガノヴァ

世代：第4世代～第5世代

待機状態は蒼と銀のブレスレット

神に頼んで作ってもらった、葵の専用機。全身装甲で機体を使用している時は、頭のパーツに赤いバイザーを装備している。動力に

はアブソリュートアクティブフォースジェネレーター+GNドライブを混ぜ合わせたものを使っているので、エネルギーとシールドエネルギーはほぼ無限。だから試合ではシールドエネルギーのみリミッターをつけている。さらに脊髄反射システムを装備しているので葵の動きを正確に再現できる

武装

断空剣：左足に格納している剣。GNドライブの力を纏わせることにより、白式の零落白夜以上の力を出す

断空砲：背中にある大砲、両腰にある砲、そして、両手に砲を展開し、撃ちだす。威力は一撃でアリーナのシールドを破るほど（普段はリミッターをつけている）

ミサイルデトネイター：腰に装備している砲から大量のミサイルを発射する

ブーストノヴァナックル：腕の手甲を打ち出して攻撃する、普段はあまり使わない

鉄拳：拳にエネルギーを纏わせて攻撃する。ちなみに機神拳も使える

単一仕様：ゴットビーストモード

顔に鷹の顔を模したバイザーが装備され全身が金色になり、胸の鼻が伸び腕にクローが装備される（アニメみたいにな感じ）。この状態では武器は使えないが、その代わり、攻撃力、防御力、機動が通常の10倍に跳ね上がる。

第1話 原作が始まるまでその一

葵 side

葵：「うん？」

目が覚めると、俺はベッドの上で眠っていた。起き上がり、外の景色を見るとそこは大自然だった

葵：「こいつは凄いな」

俺が驚いていると

『起きたのかい？』

電子音が聞こえてきた

葵：「誰だ？」

『驚かせてすまない。私はこのドラゴンスハイクのシステムを管理しているAIだ』

空中にディスプレイが展開された

葵：「そうか、もしかして神様がつけてくれたのか？」

『ああ。彼は私に君のサポートをしてくれと言っていた』

葵：「そいつはありがたい。所で名前は何て言っただ？」

俺が聞くと

『私に名前はない』

葵：「だったら俺がつけてやるよ。・・・そうだな、お前の名前はWILLだ」

ぶっちゃけ、ノヴァのをぱくっただけだな

WILL：『素晴らしい名前をありがとう。では、施設について説明する』

俺はWILLの説明を聞き、取り合えず、ISを起動させようとトレーニングルームに向かった

トレーニングルーム

葵：「へえ結構広いな」

俺が関心していると

WILL：『此処はISに乗って訓練する場所だ。普通の訓練ル

ームもあるから安心してくれ。』

葵：「IS専用のルームか。まあ、これぐらい広くないと、訓練できないからな」

広さはIS学園のアリーナ並み by 作者

葵：「さて、やりますか。超獣合神!!」

そう叫ぶと、俺のISダンクーガノヴァが装着された

葵：「さて、まずは走行からはじめるか」

俺はアリーナを歩き出した

葵：「ふむ、脊髓反射システムのおかげで動かし安いな、これなら慣れるのに時間はかからないな」

その後、アリーナを一周した俺は

葵：「次はイグニッションブーストでもやってみるか」

俺は脚の走行に力を入れ、思いっきり蹴るとアリーナの壁に激突してしまった

葵：「……………此処まで制御が難しいなんて。今度は成功させてやる」

再びイグニッションブーストに挑戦、今度は成功した

葵：「つーか、俺のイグニッションブーストってかなり早くないか？」

俺はイグニッションブーストを使用している映像を見ていった

葵：「これって、ネギまつで言う瞬動レベルだと思うんだが、G Nドライブを使ってるって思えば納得だな」

俺は無理やり納得した

葵：「次は武装の確認だな。って武器はほとんど同じだから確認しなくても問題ないけど、威力は確認しておくか。WILL、ターゲットを出してくれ」

WILL：『解った』

WILLに頼みターゲットを出してもらった

葵：「まずは、これからだな断空剣!!」

叫ぶと、左足の装甲の一部が開き、剣を射出した、俺はそれを取り、刀身を展開した

葵：「はああああああっ!!」

ブースターを使い俺はターゲットに接近し

葵：「断・空・斬!!」

ターゲットを一刀両断にした

葵：「凄い斬れ味だな。これならレアメタルでもすぱつと切れそうだ。・・・良し次は、こいつだ！断空砲、アルティメットフォウメーション！！」

俺は全砲を展開し構えた（構えはアニメ通り）

葵：「ターゲットロック！マキシマムレベル、シュート！！」

ターゲットをロックし、フルパワーで発射した

葵：「・・・・・・・・」

砲撃はターゲットを一瞬で壊し、さらにアリーナの壁も破壊した

葵：「・・・・これはリミッターをかけたほうがいいな」

その後、機体を一通り動かし、その日の訓練を終えた

第2話 原作が始まるまで、その二

葵 side

俺が転生して早3年、俺は14になった。ISでの戦闘はこの3年で急激に上がり、WILL曰く、『国家代表2人を1人で倒せる』らしい。・・・そんなに強くなったのか、俺？

葵：「ここをこうして。ここはこうで・・・」

現在、俺は整備場で新型のISの作成をしている

葵：「・・・出来た」

最後のプログラミングが終了し、俺は背伸びをした

葵：「ダイナミックゼネラルガーディアン3号機『雷凰』完成だ。

」

俺は台に座っている雷凰に近づいた

葵：「早速、起動させるか」

雷凰を起動させようとしたら

WILL：『葵、島に侵入者が来た。数は2人だ』

WILLが侵入者が入った事を知らせてくれた

葵：「侵入者？この島に？・・・WILL、映像を出せるか？」

WILL：『無論だ』

WILLはモニターを展開してくれた

葵：「おい、おい」

そこに映っていたのは、ISの生みの親『篠ノ乃束』と17代目暗部頭首『更識楯無』だった

葵：「・・・WILL、この島にはジャミングが張ってあるんだよな？」

WILL：『ああ』

葵：「じゃあ、何でばれたんだ？」

WILL：『恐らく、このあたりの海域のデータを見て、ジャミングに気づいたんと推測する』

葵：「はあ。後でジャミングの強化をしないとな」

WILL：『それで、この2人はどうするんだ？』

葵：「まあ、大事なお客様だからな、丁重におもてなししろ」

WILL：『了解』

そういうと、画面で映っている二人の足元に穴が開き、2人はその穴に落ちた

WILL：『司令室に移動させて追いたぞ』

葵：「ご苦労さん、そんじゃあ、話し合いと行きますか」

俺は整備質を出て司令室に向かった

葵 s i d e e n d

3人称 s i d e

楯無：「え」と、此処はどこなのかしら？」

意識が戻った楯無は、自分の状況を確認している

楯無：「（見る限り、此処は司令室のようね。・・・IS学園より大きいと感ずるのは気のせいかしら？）」「

楯無が周りを見ていると

束：「~~~~~」

鼻歌を歌っている、篠ノ乃束がいた

楯無：「あ、あなたは篠ノ乃博士！？何で貴方が此処に！？」

束：「うん？なんだい君は、私の知り合いに君みたいなのはいいよ。それと、邪魔しないでくれるかな？私は今、自分の知らない技術を見れて感激してるんだから」

束は冷たい目で楯無を見た

楯無：「（・・・噂どおり、自分の知人以外には冷たいのね。取り合えず、ISを起動して脱出するのが最優先ね。それと博士も助けて恩を売っておかないと）」

心でそう決め、ISを起動させようとしたが

束：「今、気分がいいから伝えておくよ。ここではISは起動できないよ。特殊な電磁はのせいか、それともこの縄のせいかは知らないけどね」

楯無：「そ、そんな」

葵：「何だ、もう起きたのか。予想より早いな」

葵が司令室に入ってきた

束：「・・・君は誰かな？」

葵：「こいつは失礼、俺の名は飛鷹葵。篠ノ乃博士、そして暗部頭首、更識楯無さん、ドラゴンスバンプにようこそ」

葵はお辞儀をした

楯無：「（私の正体に気づいている！？）」

楯無は自分が暗部頭首だと言われ、驚いた

束：「ドラゴンスバンプ。それがこの島の名前かな？」

束が葵に質問した

葵：「いいや、この島の名は龍牙島。ドラゴンスバンプはこの基地の名前だ」

葵は椅子に座った

葵：「さて、いくつか質問していいか？それと危害を加えるつもりは無いから安心してくれ」

楯無：「・・・それで、質問は？」

葵：「何、簡単な質問だ、何故この島の場所がわかったのか。そして、何の目的でこの島に着たのか」

葵が言つと

束：「私はこの島からコアの反応が6つ確認できたからだよ。この島に来たのは単なる気まぐれ？」

楯無：「私がこの島の事を知ったのはこの島から強力なジャミングが出ていたから。この島に来たのはただの調査よ」

葵：「成る程ね」

葵は納得してうなずいた

東：「今度はこっちから質問していいかな。君はここに住んでいいのかな？」

葵：「ああ。この島には俺と、この施設のWILLしか居ない」

楯無：「WILL？」

葵：「この施設を管理しているAIだ」

WILL：『始めまして』

モニターが開きWILLが二人に挨拶をした

東：「それと、もう1つ質問いいかな？何で君は此処に住んでいいのかな？」

葵：「そうだな、政府から隠れるためかな？」

東：「何の為に？」

葵：「自分の身を守るために。ISを動かせる男ってのは珍しいからな」

楯無：「男の人がISを動かせる嘘ね」

葵：「嘘じゃないんだな」これが」

翔は椅子から立ち上がり、ダンクーガノヴァを起動させた

楯無：「っ!？」

楯無は男がISを動かせた事に驚いていた

束：「……それが君のISかい？」

葵：「そう、俺の専用機『ダンクーガノヴァ』だ」

束：「すごいね、束さんでも全身装甲のISはまだ開発できていないのに」

束は感心していた

葵：「っふ」

葵はISを解除し、2人の縄を解いた

楯無：「何のつもり？」

葵：「別にいつまでも女性を縄で縛っておく趣味はないからな」

楯無：「……………」

楯無はISを起動させようとしたが

葵：「止めておけ」

いつの間にか葵が楯無の後ろに回りこんであり、腕を掴んでいた

楯無：「（私が反応できなかった！？）」

葵：「俺とお前とじゃ、力の差が違いすぎる。それと、博士。勝手にコンピュータを弄るのは止めてもらえませんか？」

束：「うん、ま、あつくんの頼みだし聞こうかな」

葵：「あ、あつくん！？」

束：「うん、束さん君の事気にしちゃった。今日からここに住むよー」

葵：「はあっ！？」

葵はわけが解らなかった

束：「取り合えず、整備室にレッゴー！！」

束は司令室をでて、整備室に向かった

葵：「ちょ、ちょっと！？」

葵はあまりの速さに驚いていた

楯無：「え〜と、取り合えず離してもらえないかしら？」

葵：「おお、ごめん、ごめん」

葵は楯無の腕を離した

葵：「それで、お前はとうするんだ？このまま、帰るか？まあ、その時は俺の記憶を消させてもらけどな」

楯無：「さらっと、とんでもない事を言っわね」

葵：「モルモットになるつもりは無い」

楯無：「記憶は消さないでもらえるかしら。っあ、安心して貴方のことは誰にも言っつもりはない」

葵：「まあ、いいだろう。」

葵は司令室をでて、整備室に向かった。楯無は慌てて葵の後を追った

（整備室）

束：「何これ、凄い！搭乗者の動きを完全に再現できるシステム・・・こっちは新しいISの設計図・・・此処は束さんにとって宝の山だー！！」

葵と楯無が整備室に入ると、テンションが最高潮の束がいた

葵：「テンション高いな、博士は」

東：「うん？あつくん、来たんだ。そうだった！あつくんのISのデータを見せて」

葵：「っえ？は、はい」

葵はキーを叩きノヴァのスペックを表示した

東：「ほう、ほう。って、何これ！？動力のおかげでシールドエネルギーと普通のエネルギーがほぼ無限！？こっちのシステムはさっき見たから驚かないけど、ワンオフアビリティを発動するとスペックが10倍に跳ね上がる！？何このチート機！？」

東は驚いていた

東：「あつくん、このIS誰が作ったの？」

葵：「一応俺ですが」

東：「凄い、凄い。あつくん、私と結婚しよ」

葵：「結婚！？博士、俺はまだ14ですよ」

東：「博士って、そんな他人行儀な言いかたしないでいいよ。もっとフレンドリーに」

葵：「じゃ、じゃあ東さんで」

楯無：「なんか、私の影が薄くなってきた様な」

束：「うん？まだ居たのかい君は、とっと帰りなよ。束さんは今からあつくと熱い夜を凄いですんだから」

葵：「束さん、さっき言いましたよね、俺まだ14。それはまだ早いです。それと、あまり他人を邪険しないほうがいいですよ」

楯無：「葵君／＼（か、かつこいい）」

葵はまたフラグを立てた

束：「むう、あつくんがそう言うなら、その子のことは認めてあげる。でも、正妻は私だよ！！」

葵：「何の話ですか？つーか日本は一夫多妻の制度じゃないんですけど！？」

葵は束の発言に突っ込みを入れた

楯無：「そうだっ！！博士、ちょっとこっちに」

束：「何かな」

楯無：「実はですね。ゴニョ、ゴニョ」

束：「それはいい考えだ！よし君もあつくんの正妻に認めよう。ついでに、君のISも見てあげるよ」

楯無：「ありがとうございます」

葵：「一体何なんだ？」

葵はこの状況についていけなかった

第3話 原作が始まるまで、その三

葵 side

ドラゴンスハイブに束さんが住み始めてから早2年。束さんは毎日楽しそうにISの設計とコアの作成をしている。楯無は去年からIS学園に通い始めたので滅多に來ないが、俺が作った長距離転送装置を使い、たまにこっちに遊びに來ている。そんなある日

束：「あつくん、IS学園に行ってくれないかな」

葵：「はあ？」

俺は首をかしげた

葵：「束さん、何で俺がIS学園に行かないといけないんだ？俺以外の男はISを使えなんだぜ？俺がモルモットになるのいやだつて事知ってるでしょ？」

俺が束さんにそう言つと

束：「そうも言つてられないんだよ。ほら、このニュース見て」

束さんはテレビをつけた。そこには『特報、男性で始めてISを動かした男の子織斑一夏』つとでていた

葵：「（ああ、もうそんな時期か）」

俺はすっかりと忘れていた

東：「でね、あつくんにいつくんを鍛えて欲しいんだ。いつくんは、これから起こる事件の中心人物になるかも知れないから。自分の身と自分の大切な人を守るぐらいに強くなってほしんだよ」

葵：「だが、俺が今出て行ったら、俺もその事件の中心になるんじゃないか？」

東：「あつくんなら大丈夫だよ。身体能力はちーちゃん以上だし、ISの戦闘でも全国家代表を一人で倒せるでしょう。ダンクーガだって2次移行したしね」

葵：「……まあ、あれには誰も勝てないな。まあ、もし行く時には強制的にリミッターをかけるけどな」

東：「もし行ってくれるなら、今日は東さんかなりサービスしちゃうよ」

葵：「まじで!？」

この2年の間で、俺は東さんと楯無にあるものを奪われた。最初はショックを受けたが、よく考えると、二人ともかなりの美人なので、結果オーライかなと思いき直った

葵：「………解かった、東さんの頼みだからな、IS学園に行こう」

束：「本当！あつくん、大好き！！」

束さんが俺に抱きついた

葵：「でも、セカンドシフトのリミッターをかけるのに時間がかかるから行くのは、1週間後だぜ？」

束：「それで良いよ。束さんも頼まれたことをしないとイケないか」

葵：「頼まれた？何を？」

束：「ちよつとね。それより、今日は楽しみだな」

葵：「っえ？あれマジだったんですか？」

束：「うん」今夜は寝かせないよ」

その翌日、俺は腰痛になってしまった

それから、約1週間後

葵：「ふう、リミッターをかけるのにこんなに時間が掛かるとはな」

束：「でも、それを1週間やるあつくんもあつくんだけだね」

俺は待機状態の相棒を首にかけ、着替えの入ったバッグをしまった

束：「学園のほうには連絡しておいたから安心してね」

葵：「どうも」

束：「うん、でも、ここに一人でいるのは寂しいな」

葵：「一応転送装置は持ってるから、暇なときに戻ってきますよ」

束：「うん。待ってるよ」

葵：「じゃあ、行って来ます。WILL、束さんのこと頼むぞ。
主に食生活」

WILL：『解かった』

俺は基地に外に出、置いていた水陸両々のバイクに乗り、龍牙島
を後にした

葵：「さて、これから大変かもしれないが、……やあつてやるぜ——！」

第4話

千冬 side

クラス代表が決まった翌日、私が食堂で食事をしていると

『番組の途中ですが、臨時ニュースです。先程、ISの開発者、篠ノ之博士からメッセージが届きました。その内容によると、世界で初めてISを動かした男性は『織斑一夏』ではないようです!』

千冬：「つぶ。な、何だと!？」

私はその会話を聞いて驚いてしまった

『メッセージを再生します。皆さん、どうか落ち着いて聞いてください』

束：『やあ、やあ、世界の皆、元気かい？束さんだよー。さて、世間では織斑一夏君が世界で初めてISを動かした男性だっ取り上げてるけど。本当は違うんだな。この子『飛鷹葵』君こそが初めてISを動かした男性だよ。それと、彼に手を出さないでね、束さんの大事な人だから。もし、彼に何かあったら、ISのコアはもう作らないし、手を出した国には世界地図から消えてもらうよ。それじゃあ、バイビー』

『……以上が篠ノ之博士のメッセージです』

私が驚いていると、携帯が鳴った。確認してみると、あの馬鹿からだった

東：『やつほー、ちーちゃん元気？皆のアイドル束さんだよ』

千冬：「東！あのメッセージは本当なのか！？」

私が急いで確認すると

東：『本当だよ。あつくんこそが世界で初めてISを動かした男性だよ。それと、あつくんは今、IS学園に向かっているから。多分、そろそろつくはずだよ』

千冬：「なに！？」

東：『ちーちゃんには一応言っておくね。彼、かなり強いよ。もしかしたらちーちゃんよりも、ううん、本当の世界最強だね。それじゃあ、あつくんの事よろしくね』

そう言つと、東は電話を切った。私はHRを副担の山田君に頼み、急いで正面口に向かった。私が正面口に着くと、バイクに乗った青年、飛鷹葵がいた

千冬 side end

葵 side

葵：「ここがIS学園か。・・・でかすぎるう」

俺はヘルメットを取り、学園を見た。そして、バイクを降りたその時

千冬：「飛鷹葵だな？」

葵：「うん？」

俺はスーツを着た女性に声を掛けられた

葵：「そうですけど、貴方は？」

千冬：「失礼、自己紹介がまだだったな。私は織斑千冬、IS学園の教師だ」

葵：「織斑千冬・・・。ああっ！束さんが言ってた人か」

千冬：「電話で聞いた時も驚いたが、よくあの束が気を許したものだ。アイツは私、一夏、篠ノ之以外は目もくれないからな」

葵：「まあ、色々ありましてね、白騎士さん」

千冬：「っ！？」

葵：「大丈夫、他の奴らには言いませんよ。それでも、俺、口は堅いんでね」

千冬：「……そうか。では、ついてこい。クラスに案内する」

葵：「はい、織斑先生」

俺はそう言い、千冬さんの後を着いて行つた。クラスに行く前に職員室により、転入書を書いたのはお約束

千冬：「では、此処で待っている」

俺は千冬さんに案内され、クラスに着くと、ドアの前で待機させられた。暫く待っていると、教室からものすごくいい音が数回聞こえた

葵：「（……あれは出席簿で出せる音じゃねえよな）」

千冬：「では、入ってこい」

考え事をしていると、声がかかったので教室に入った。俺は教壇の前まで移動し

葵：「飛鷹葵だ、皆より一歳年上だが、普通に声を掛けてくれ」

俺は軽い挨拶をすると

「きゃあああああああ!!」

クラスの女子（一部を除く）が大声を上げた

「男子!しかも、かなりのイケメン!」

俺はこの叫びに体を引いてしまった

葵：「（原作は少し知っているが、これはさすがに予想以上だな）」

俺が冷や汗を流していると

千冬：「静かにせんかバカ者ども！！飛鷹は空いてる席に座れ。
次は第一グラウンドでのISの操縦だ、遅れないように。織斑、飛鷹
を更衣室まで案内しろ。HRはこれで終わりだ。解散」

HRが終わり、席を立とうとしたら、

一夏：「俺は一夏、よろしくな飛鷹さん」

葵：「よろしく。俺の事は葵でいい」

一夏：「だったら、俺も一夏でいいぜ」

俺は一夏と話をしながら更衣室に向かった

第5話

葵 side

千冬：「では、これよりISを使つての實習に入る」

俺達はISスーツを着てグラウンドに立っている

一夏：「それにしても、葵のスーツって俺と全然違つな」

葵：「俺のは特別せいだからな」

俺はアニメダンクーガノヴァに出てくる飛鷹葵の操縦服男版を着ている

千冬：「そうだな、専用機を持っているものが3人いるから、今日は模擬戦しよう」

「先生、専用機を持っているのはセシリアさんと織斑君の二人じゃ無いんですか」

千冬：「飛鷹も専用機を持っている」

千冬さんの発言でクラスの全員が驚いた

葵：「先生、ばらさないで下さいよ」

千冬：「問題ないだろう？では、飛鷹対織斑・オルコットペアで模擬戦をおこなう」

セシリア：「織斑先生、2対1では飛鷹さんの方がふりでは」

千冬：「飛鷹は私の全盛期以上の力を持っている」

一夏：「それ本当か、千冬ねえ！？」

千冬：「織斑先生だ」

千冬さんが持っていた出席簿で一夏の頭を叩いた

千冬：「飛鷹のそれでいいな？」

葵：「構いませんよ、そうじゃないと勝負にならないですからね」

千冬：「では、ISを起動させる」

千冬さんに言われ、一夏とオルコットはISを起動させた

葵：「超獣合神！！」

俺は起動コードを言い、ダンクーガを起動させた

セシリア：「なっ、全身装甲！？」

一夏：「それが、葵のISなのか」

葵：「ああ」

千冬：「飛鷹、声に出さずに起動させろ」

葵：「無理です。こいつは起動コードを言わないと装着できないんですよ」

千冬：「なら仕方ないな。3人共空に上がれ」

「はい」

俺達は空に上がり二手に分かれた

翔 s i d e e n d

3人称 s i d e

千冬：「それでは、模擬戦始め！！」

一夏：「先手必勝！！」

千冬の合図と共に一夏が葵に突っ込んできた

葵：「…………アホ」

葵は体を少しずらして一夏の突進をかわすと、裏拳を2発叩き込んだ

一夏：「があっ!」

セシリア：「一夏さん!この」

セシリアは銃で葵に攻撃してきた

葵：「狙いはいいが、直線的だ」

セシリア：「…………なら、これはどうですか!」

セシリアはビットを展開し、葵を囲むように配置させ一斉砲撃を仕掛けた

葵：「よっ、はっ、っと、ほいつ」

葵は全方位からの攻撃を難なくかわした

セシリア：「そ、そんな」

葵：「…………そんなじゃあ、今度はこっちから行くぜ!」

葵はイグニッションブーストを使い、セシリアとの距離を一瞬で縮めた。そして

葵：「おらあっ!!」

エネルギーを収束させた拳でセシリアを殴り飛ばし、エネルギーをゼロした

セシリア：「きゃあああああ」

一夏：「セシリア!このー!!」

一夏は白式のワンオフアビリティ『零落白夜』を起動させ、葵に突っ込んできた

一夏：「おおおおお!!」

葵：「・・・零落白夜か。自身のエネルギーを喰らいそれを力に変える。諸刃の剣か」

一夏：「はあああああっ!!」

一夏は雪片二型を横に振るい葵に攻撃してきたが

葵：「そんなのに当たるかよ」

葵は下に急降下しそれをかわした

一夏：「つな!？」

葵：「ミサイルデトネーター!!」

急降下した葵はすかさず一夏に大量のミサイルを撃ち込んだ

一夏：「ぐうつ!!」

葵：「……………ほい、これで終わりだ」

そして、急上昇し、エネルギーを収束した拳で地面に叩き落とし、
一夏のシールドエネルギーをゼロにした

千冬：「そこまで、勝者飛鷹葵」

模擬戦は葵の圧勝で幕を閉じた。因みに葵は力の10分の一もだ
さないで二人に勝った

第6話

3人称 side

「織斑君、クラス代表おめでとう。そして、飛鷹君、ようこそ、1 - 1へ!」

現在、葵達は食堂で、一夏のクラス代表就任と葵の歓迎会を食堂でおこなっている

葵：「サンキュー」

一夏：「あ、ありがとう？」

葵：「しかし、驚いたな。まさか、一夏がクラス代表だなんて」

一夏：「まあ、不意なんだけどな。・・・そうだ!葵、俺と替わってくれよ、やっぱ、強い奴の方がいいし」

一夏はどこか期待した目で葵に話しかけてきた

葵：「やだね。俺がなったら瞬殺で終わっちまう。それに、代表はお前にとってプラスになるかもしれないぞ」

一夏：「どという意味だよ?」

葵：「代表はクラスの中で一番ISに乗っての戦闘をおこなう。ISを動かしてまだそんなに時間の経ってないお前には丁度いいと思うぞ」

一夏：「な、成程」

一夏は葵の説明を聞いて少し納得した

箒：「人気者だな一夏」

一夏：「・・・本当にそう思うか？」

葵：「そう思うやつがいるなら病院に行った方がいいな」

箒：「ふん」

葵：「（束さんの妹は色々と問題が多そうだな）」

葵が心でそう思っていると

薫：「はいはい、新聞部です。話題の男性操縦者二人にインタビューに来ました。あ、私は二年の薫薫子。よろしくね。新聞部の副部長やつてるの。はいこれ、名刺」

葵と一夏は名刺をもらった

薫：「じゃあ、織斑君。ずばりクラス代表になった感想は？」

一夏：「まあ、何というか、頑張ります」

薫：「ええ〜！？それだけ〜？もつといいコメント頂戴よ、『俺に触るとヤケドするぜ！』とか」

一夏：「自分・・・不器用ですから」

薫：「うわ！前時代的！！まあ、そこは適当に捏造するからいいとして」

葵・一夏：「（捏造するのかよ！？）」

薫：「次に、飛鷹君、なにか一言」

葵：「・・・そうだな、俺は全てを粉碎する」

薫：「おお、これは捏造しない方がいいね」

葵：「（捏造する気なら、質問するなよ）」

葵はこんなのが新聞部部長でいいのかと、心底思った

薫：「じゃあ、専用機持ち3人で写真を撮るから、並んで」

そう言われ、葵は渋々、立ち上がり、写真を撮ってもらった。移るときにクラス全員がはいったのにはびっくりしたな

その後、葵は一夏を犠牲にして会場から脱出した

葵：「ふ〜、いい月だな。酒を飲めるなら月見酒でもしたいもんだ。・・・うん？」

葵は寮に戻る途中、一人の女の子がうろろろしているのを見つけた

葵：「おい、こんなところでどうしたんだ？」

葵はその子に聞いた

「え？えっと、受付を探してたんだけど、道にまよちゃって」

葵：「ふむ、……ついてこい、案内してやるよ」

葵は寮への道なりから校舎への歩いて行った

「ちょ、ちよつと待ちなさいよ」

迷子の女の子は慌てて俺についてきた

葵：「そう言えば、まだ自己紹介してなかったな。俺は飛鷹葵、お前は？」

「飛鷹葵って、今日篠ノ之博士が発表した最初にISを動かした男性！？」

葵：「（……束さん、貴方どんな風に言っただんですか？）あ、俺がその飛鷹葵だ」

「まさか、此処に来て最初に会うなんて。っあ、私は鳳鈴音、中国の代表候補せいよ」

葵：「俺の事は葵とでも呼んでくれ」

鈴：「じゃあ、あたしの事も鈴でいいわよ」

葵：「んじゃ、改めてよろしくな鈴。っお、着いたぞ。入って、直ぐの所に受付がある」

鈴：「ありがとう」

葵：「気にすんな、困った時はお互い様さ。それと、・・・ほれ」

葵は上着を鈴に投げ渡した

鈴：「うわ」

葵：「着ておけ、来てそうそう、風邪ひきたくないだろう？返すのは、いつでもいい。じゃあな」

そう言つて、葵は寮に向かった

鈴：「飛鷹葵つか。一夏と同じで結構いいやつかもしれないわね」

葵：「えっと、1026わつと。っお、ここか」

葵は千冬に渡された鍵を使ってドアを開けると

楯無：「お帰りなさい。ご飯にする？ お風呂にする？ それと

もわ・た・し？」

直ぐに、ドアを閉めた

葵：「今のきつと、幻覚だ。うん、きつとそうだ」

葵はそう決め、ドアを再びあけた

楯無：「お帰りなさい。私にする？私にする？私を選んで」

葵：「選択肢が一つしかないぞ、楯無」

葵は裸エプロン姿の楯無に突っ込みを入れた。そして、ドアを閉め、鉤を掛けると

葵：「久しぶりだな、楯無。元気そうじゃねか」

楯無：「まあね、葵も元気そうで安心したよ」

葵：「色々、言いたいことはあるがどうやって入った？それと、明らかに俺以外の荷物があるんだが」

楯無：「ピックアップで入って、荷物の件は今日から私もここに住むからよ。許可はえてるは、勿論生徒会長権限を使って」

葵：「それって、職権乱用だろう」

楯無：「うゝん、聞こえない」

葵：「はあ」

葵はため息をつき、布団に寝ところがつた

楯無：「あれ？もう寝るの？お風呂は？」

葵：「もう、入ってある」

楯無：「じゃあ、久しぶりにお願いしてもいいかな？」

葵：「お願いって、どうせ俺には拒否権は無いんだろう？。」

楯無：「うん」

葵：「はあ」

こうして、葵は春だと言うのに暑い夜を過ごした

第7話

葵 side

歓迎会の翌日、腰痛になっていたが、何とか起き上がり束さん特製回復薬を飲んだ俺は、楯無を起こし、食堂に行き、朝食を取った後、クラスに向かった。途中、一夏たちと合流し、そのままクラスまで一緒に歩いた

「飛鷹君、織斑君おはよー。聞いた？隣の二組に転校生が来るんだって！」

一夏：「転校生？」

セシリア：「何でも、中国の代表候補性らしいですわ。私の存在を危ぶんでの転入かしら？」

箒：「このクラスに転入してくる訳ではないのだろう？騒ぐほどの事でもあるまい」

葵：「（いや、普通転校生が来るって知ったら、騒ぐだろう）」

俺は篠乃之の発言に心の中で突っ込みをいれた

一夏：「代表候補生か・・・どんな奴なんだろうな？」

第：「気になるのか・・・？」

一夏：「まあな」

第：「今のお前に女子を気にする余裕はないぞ！来月にはクラス対抗戦があるんだからな！」

セシリア：「そうですね。一夏さん。対抗戦に向けてより実践的な訓練をしましょう」

一夏：「確かに、実戦訓練は必要だよな」

葵：「っあ、そうだ。一夏、お前の訓練についてだが・・・」

俺が一夏に言おうとしたとき

「そうそう、織斑君には是非勝って貰わないと。優勝賞品は学食デザートの半年フリーパス券だからね」

「それも、クラス全員分の！」

「織斑君が勝つとクラス皆が幸せだよ」

一夏：「お、おう」

一夏は苦笑いをした

「まあ、うちには専用機持ちが3人もいるし、楽勝だよ！ね、織斑君？」

一夏：「え？ああ、そうだな」

鈴：「その情報、古いよ」

すると、ドアの方から声が聞こえた

鈴：「二組も専用機持ちがクラス代表になったの。そう簡単には勝てないから」

一夏：「お前・・・鈴・・・お前・・・鈴か？」

鈴：「そうよ。中国代表候補生鳳鈴音。久しぶりね一夏。もう少し話したいけど、もうすぐ授業が始まるから、また後でね」

そう言い、鈴は自分のクラスに戻って行った

葵：「（一波乱起きそうだな）」

俺は自分の席に着き、空を眺めながら思った。その直後、千冬さんがクラスに来、席に着いていなかった生徒に出席簿を振り降ろした

葵 side end

3人称 side

箒：「お前のせいだ!!」

セシリア：「貴方のせいですわ!!」

午前の授業が終わり、箒とセシリアは一夏に文句を言っていた。
理由は鳳鈴音が気になり、授業に集中できず、千冬に出席簿で3回
頭を叩かれ、山田先生にも5回注意された

一夏：「何だよ」

葵：「つか、自業自得だろう。それより食堂に行こうぜ、腹減
って死にそうだ」

一夏：「それもそうだな。箒とセシリアはどうするんだ？」

箒：「お前がそう言うなら」

セシリア：「一夏さんがそう仰るなら」

葵達4人は食堂に向かった

鈴：「待ってたわよ、一夏」

食堂に着いたら、鈴がラーメンを持って一夏を待っていた

一夏：「そこに居たら食券が買えないだろう」

鈴：「わ、解ってるわよ」

葵達はそれぞれ、料理を注文し、受け取ると全員が座れそうな席に座った

一夏：「いつ戻ってきたんだ？驚いたぞ」

鈴：「それはこっちの台詞よあんたがISを動かしたってニュースを見たときは」

一夏と鈴は懐かしそうに話している。箒とセシリアはそんな二人を見て、わなわなと震えており、葵はそれを無視して食事をとっている。かなりの力オスである

鈴：「そうだ。葵、昨日はありがとう。これ返すわね」

鈴は昨日の夜借りた上着を葵に返した

一夏：「葵、お前鈴の事知ってるのか？」

葵：「いや、昨日のパーティーの帰りにたまたま会ってな。受付がどこか解らないって言うから案内したんだ」

一夏：「ふん」

セシリア：「一夏さん、そろそろどういう関係か説明していただきたいですわー！」

箒：「そうだぞ。まさか、つ、付き合ってるなんてことは無いだろうな！？」

箒とセシリアは我慢できず、一夏に二人の関係を聞いた

鈴：「べ、別に付き合ってるわけじゃ／＼」

一夏：「そうだぞ、何でそんな話になるんだ？ただの幼馴染だよ」

箒：「幼馴染？」

一夏：「箒とは入れ違いに転校してきたんだよ。箒が転校したのが小学4年の終わりだろ？鈴は小学5年の頭に中国から転校してきたんだよ」

鈴：「一夏、その子だね？」

一夏：「前に話しただろう？俺が昔通っていた道場の師範の娘だよ」

鈴：「そう、これからよろしくね」

箒：「篠ノ之箒だ。こちらこそよろしくな」

二人は笑顔で話していたが、火花が散っており、後ろには龍と虎が見えた。その後、セシリアも自己紹介をしたが、鈴が他の国に興味が無いと言った

鈴：「そんなことより、一夏。あんたクラス代表なんだって？ISの操縦私が見てあげてもいいけど。も、勿論一夏さえよければだけど」

一夏：「そいつは助かる。じゃあ・・・」

箒：「一夏に教えるのは私の役目だ。直々に頼まれたのだからな」

セシリア：「そうですね。敵の施しなど受けませんわ」

鈴：「あたしは一夏に聞いているの。関係ない人は黙ってて。葵ならいいけど」

葵：「俺はいいのかよ」

葵は鈴の言葉に突っ込みを入れた

葵：「まあ、箒とセシリアは一夏に教えられるけどな」

箒：「どついう意味だ!!」

葵：「一夏の訓練は今日から俺が見ることになったから」

葵は食後のお茶を飲みながら言った

一夏：「そうなのか？」

葵：「ああ。織斑先生に直々に頼まれてな。ほい、これが証明書だ」

葵は一枚の紙を一夏達に見せた

葵：「ああ、それコピーだから、破いても無駄だぞ。本紙は先生が持つてるから」

それを聞いて箒とセシリアはうなだれてしまった

葵：「鈴、一夏に教えるのは構わないが、もし教えたのならクラス対抗戦が終わってからにしろ、ISの装備を見せて対抗策を練られたくないだろう」

鈴：「……それもそうね」

葵：「っという訳で、一夏。放課後グラウンドにこい。ISスーツじゃなくてジャージでいいから。それと、木刀があるなら木刀ももってこい」

そう言い、葵は席を立った

そして、放課後

葵：「っで、何で箒とセシリアまでいるんだ？しかも、ISを起動させて」

箒：「お前には関係ない」

セシリア：「そ、そうですわ」

葵：「……っまいつか。じゃあ、訓練を始めるぞ一夏」

一夏：「おう。っで、何をやるんだ？ジャージで来いって言うか

らジャージで来たけど」

葵：「これからやることにISは必要ないからな」

セシリア：「で、ですが。ISを使つての訓練の方が大事ですわ」

葵：「つま、それもそうだが。一夏にはISでの訓練よりもっと大事な事を教えないといけない」

一夏：「なんだよ、大事な事って？」

一夏が葵に質問した

葵：「集中力、判断力、動体視力に反射神経だ。これは戦いにおいて重要なことだからな」

第：「それなら、ISを使つてでも出来るだろう」

葵：「確かにそうだが。千冬さんに聞いたところ、一夏は随分長いこと剣を握っていなかったらしいからな。まずはそれを元に戻す、ISでの訓練はそれからだ」

一夏：「成程」

葵：「じゃあ、始めるぞ」

葵はポケットから小さな機械を取りだし、ボタンを押すと、バツティングセンターにある機械で現れた

葵：「一夏、これから発射されるボールを全てその木刀で叩き落

とせ、防御してもいいがな」

一夏：「・・・こんなので集中力とかを元に戻せるのか？」

葵：「ものは試しだ。これの前に立ってみる。あと、これをつけておけ」

葵は一夏にプロテクターを渡しつけさせた

葵：「一発目はサービスだ」

そう言い、機械からボールが射出された。そのボールに一夏は反応できなかった

一夏：「つな!？」

葵：「今のはプロテニスプレイヤーのサーブのスピードだ。まあ、少しは速度を落とすが良い訓練になるだろう?」

一夏：「あ、ああ」

葵：「そんじゃ、行くぞー」

それから約一時間、一夏は機械から射出されるボールを相手にした。結果はボロボロである。一台の時は良かったが。3台に増え更に、時間差で射出させるボールに対処できず、ボロボロになった

葵：「今日はこれで終了だ。戻ってゆっくり体を休めろ」

一夏：「お、おう」

一夏は何とか立ち上がり、ベッドに戻って行った

葵：「……………っで、いつまでそこで見ているんですか、織斑先生？」

一夏達が居なくなっただのを確認すると、葵はドアの後ろにいる千冬に声を掛けた

千冬：「気づいていたのか？」

葵：「まあ、一応。一夏の事がそんなに心配なんですか？」

千冬：「まあな。お前にあいつの訓練を任せたのもそんな所だ」

葵：「あいつは筋がいいですよ。まあ、昔の感を取り戻すのに苦労してますけど」

千冬：「……………あいつの事を頼む」

葵：「解ってますよ。アイツが自分の身を守るくらいにまでは鍛えるつもりですから」

そう言い、葵もベッドに戻った

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9984x/>

IS(インフィニットストラトス)～獣戦機に乗る者～

2011年11月18日16時26分発行